長崎県文化財調査報告書　第138集

桟原城跡調査報告書

1997

長崎県教育委員会

例　言

１、本報告は、長崎県下県郡厳原町所在、桟原城跡における石垣遺構の調査報告書である。

２、調査は、平成８年７月15日～７月26日に実施したもので、長崎県対馬支庁道路課、維持舗装班が調査主体となり、調査は株式会社パスコに委託した。調査については、県教育委員会が指導した。

３、本書の執筆、編集は福田（長崎県教育庁文化課　文化財保護主事）がおこなった。

本文目次

１、桟原城の地理的、歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
２、桟原城について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
３、調査に至る経緯、及び調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
４、石垣遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
５、まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

挿図目次

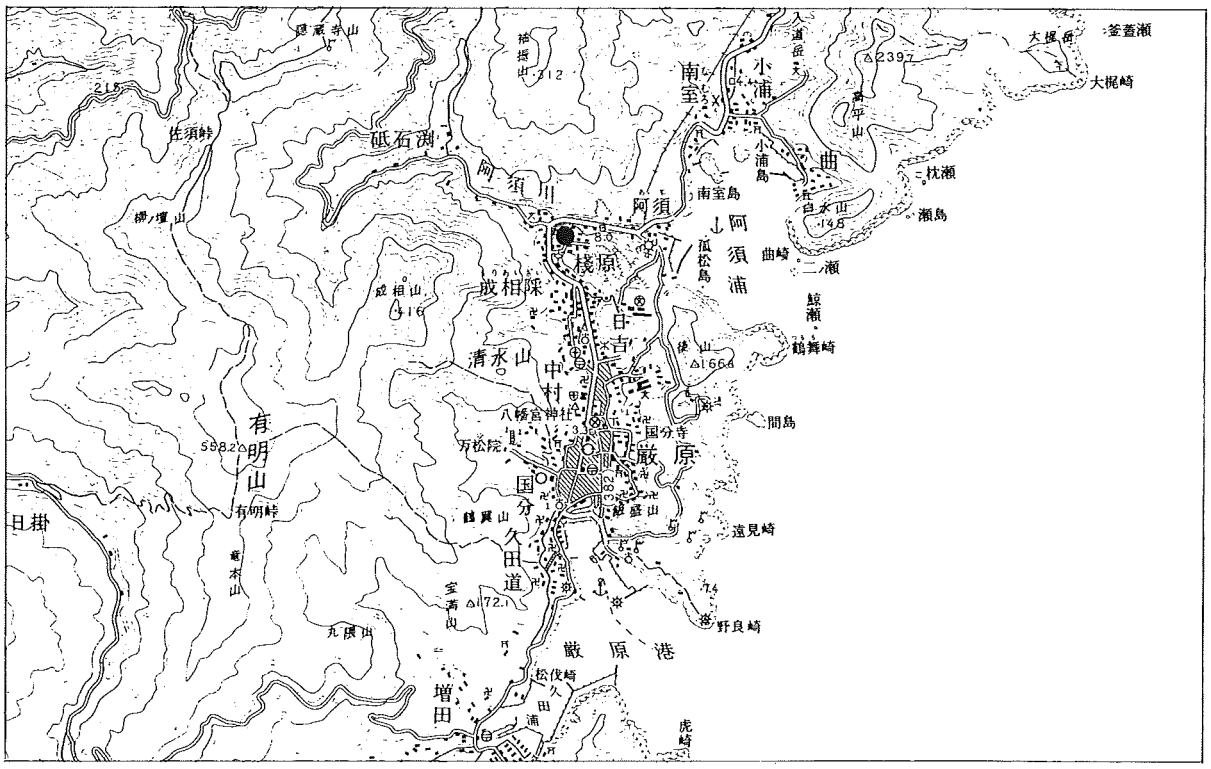
第１図　桟原城跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
第２図　桟原城跡周辺図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
第３図　平成６年度調査地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
第４図　平成６年度調査区出土の近世陶器・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
第５図　平成６年度調査区出土の朝鮮王朝陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・５
第６図　平成６年度調査区石垣実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
第７図　石垣実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９
第８図　厳原町内近世石垣変遷仮定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
第９図　石垣全体図、断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２

図版目次

図版１　桟原城北西隅石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
図版２　厳原町内の近世石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

1、桟原城の地理的、歴史的環境

桟原城は、長崎県下県郡厳原町字桟原に所在する、標高３２ｍ程の平山城である。桟原の地名は、宗氏が鎌倉時代に在地の土豪の阿比留平太郎時国を討ったときに、この地に首をさらしたことに由来するという。付近に首塚があったとされるが、現在は不明である。城は、東に成相山（４１６ｍ）、西に後山（166m）、北に袖振山（312m）の三方を山に囲まれた狭小の地に位置し、現厳原町の中心街より北に約3,5 ｋｍ程入った所にある。桟原の地形については、『津嶋紀事』に「・・・・別埜ヲ桟原ニ造営ス則山ヲ平ラゲ谷ヲ埋メ幷木ヲ伐拂シテ家ヲ建・・・」とあり、桟原がもとは山や谷であり、それを造成したことが知られる。現在桟原の地は、33m程の台地になっているが、もとは独立丘陵を形成していたものと思われる。平成６年の調査によれば、主郭から降りる坂の部分は、埋め土であり、坂の前面は谷状になっていたものであろう。いずれにせよ桟原城が厳原の中心から外れた北側に築城されたことは、いままでの居城である金石城が『津嶋紀事』では、「朝鮮ノ使者接待ニヨカラザル」ことであったためにこの地が選ばれたとされる。また、平成６年の調査時には、桟原下層として、朝鮮王朝陶磁が出土しており、築城以前からこの地に生活の跡があったことが知られる。桟原城の周辺の歴史は比較的新しく、江戸時代を中心にその遺構が存在するが、桟原下層の遺物の中に、小片ではあるが須恵器が３点ほど出土していることから、古墳時代の遺跡があったことは明確である。



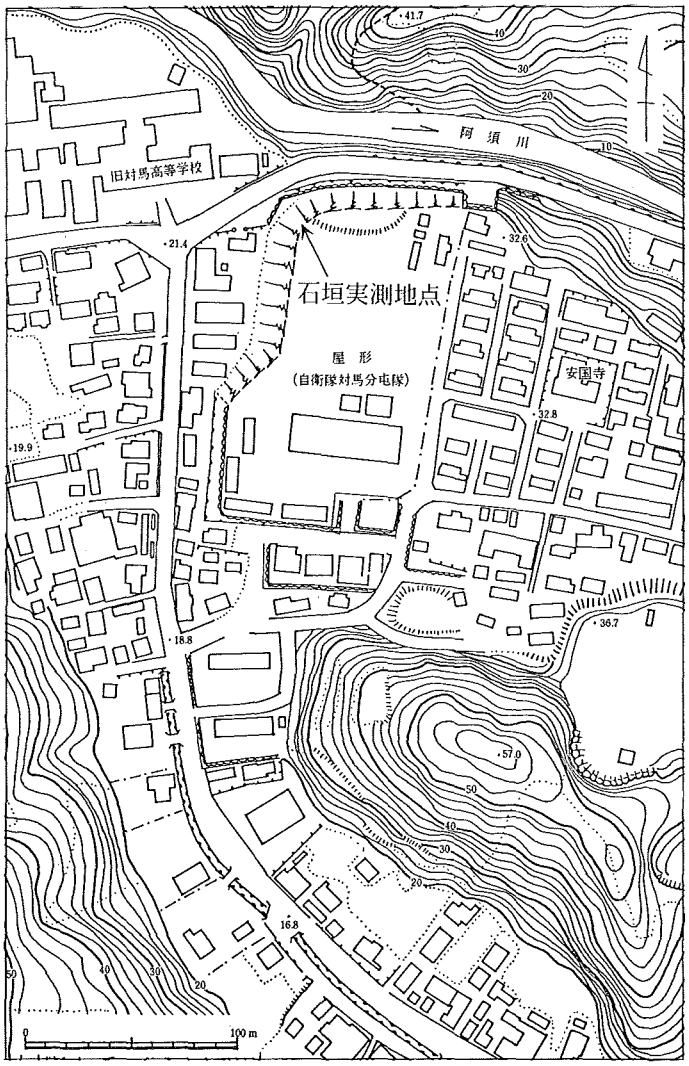
第１図　桟原城跡位置図

2、桟原城について

桟原城は、現在陸上自衛隊対馬派遣隊が駐屯しており、国境の防衛にあたっている。対馬が防衛の前線基地となるのは歴史的に古く、６６３年の白村江の戦以後、新羅の進攻に備え、６６７年金田城を築城したのにはじまる。このときは、防衛のための最初の要として築城したものである。これとは逆に、朝鮮侵攻のために築城されたのが、壬辰倭乱（文禄・慶長の役）のときの清水山城である。これ以後も対馬はその地理的位置から、国の最前線基地として、常に重要視されていた。ただし、江戸時代においては、朝鮮との善隣友好の架け橋として、金石城、桟原城が機能しており、とくに桟原城は、『朝鮮通信使』を受け入れるために新しく築城されたものであり、そのような意味では、対馬の歴史の中のでも特筆すべき性格を持っていると言ってよいだろう。

桟原城は、万治元年（１６６０年）、宗家２１第藩主義真が１８年の歳月をかけて延宝六年（１６７８）に完成した。桟原の地に城を移した背景として、『朝鮮通信使』を迎えるにあたって、これまでの金石城では手狭であり、『朝鮮通信使』に対し藩の威容を見せられないということ、金石城が、港から近いため、『朝鮮通信使』の隊列が整わないなどの理由があったとされる。

古来より対馬は朝鮮との交易によって、生計をたてており、朝鮮なくしては生き残る術がなかった。そのことは壬辰倭乱以後における対馬藩の対朝鮮にたいする外交政策を見てもそのことが理解できる。その苦労は１６０９年の己酉条約に結実した。このような経過をみても、桟原城が対朝鮮との外交の中心的役割を担っていたことが、理解できよう。



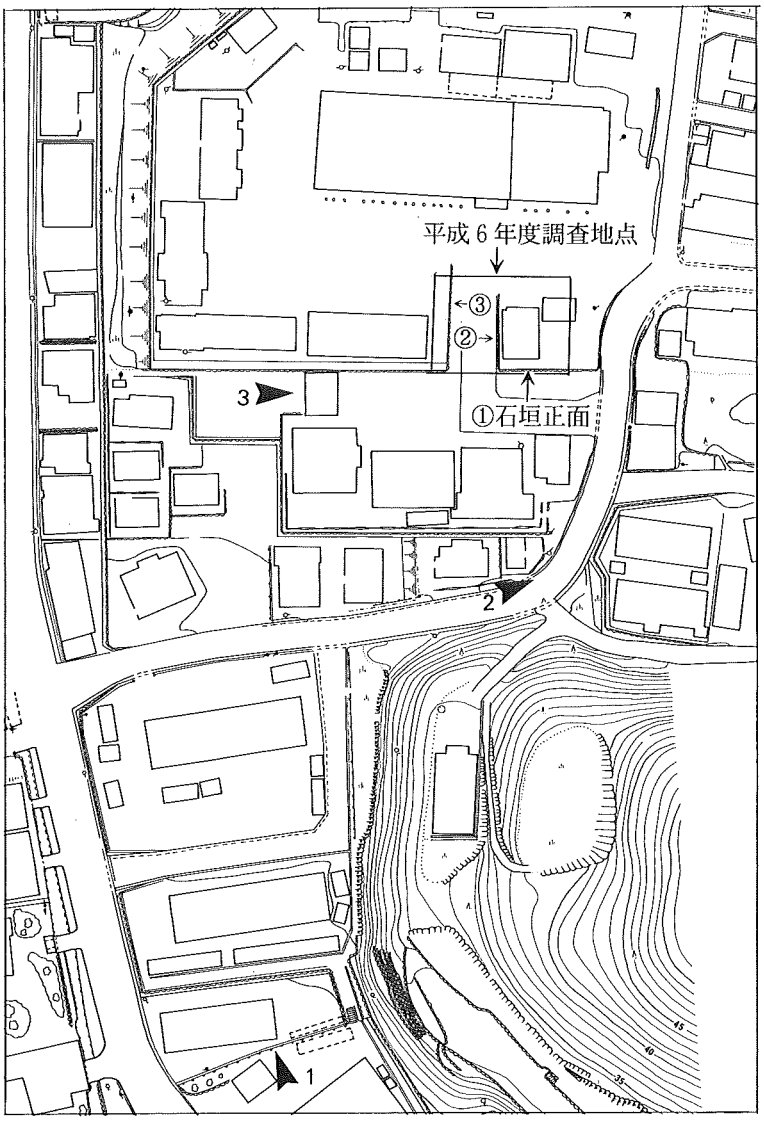
第２図　桟原城跡周辺図

参考文献

厳原町教育委員会『厳原町の文化財』1911
長崎県対馬支庁『対馬百科』　1984

3、調査に至る経緯、及び調査

桟原城に関する調査は、平成６年に三ヶ月に渡って調査したのを初めとする。この時の調査は、自衛隊の隊舎建設に伴うもので、約５００㎡が調査の対象となった。調査によると、遺構は後世の工事等によって、かなりの改修がおこなわれているようで、原形をとどめる遺構はほとんどない状況である。石垣については一部修復された形跡があるが、ほぼ往時の原形を止めている。修復された石垣の裏込めからは、近世陶磁器が多量に出土しており、その中でも対州焼と思われる一群が多量に出土している。碗には「上」・「中」の他に、色々な文字が書かれていたり、彫り込んだものが見られる。このような文字入り碗が多量に出土し、その意味については不明とされている。ただし、これらの近世陶磁器は、対馬で作られた陶磁器である対州焼と考えられる。対州焼については、志賀窯・久田窯・阿須窯などいくつかの窯が知られている。但し、それぞれの作品についての詳細は不明で、どの窯でどのような作品を造っていたかについては、今後の研究に待たねばならない部分が多い。出土の文字入り碗は、同じ様な特徴をもっているため同一の窯で作製されたものと考えられる。報告のなかでは志賀窯の作品の可能性を出土陶器にもとめている。その根拠として、志賀窯は、藩窯としての機能を長く持っていたこと、藩の中心である桟原城内にこれらの近世陶磁器が出土したことなどがその理由とされている。出土の文字入り碗が志賀窯の作品とするにはまだこれからの対州焼の研究に待たねばならないところが多いといえよう。これらの陶磁器のほか、朝鮮王朝陶磁が築城以前の桟原下層とした層より出土している。時期とし



第３図　平成６年度調査地点（①～③は門跡を指す）

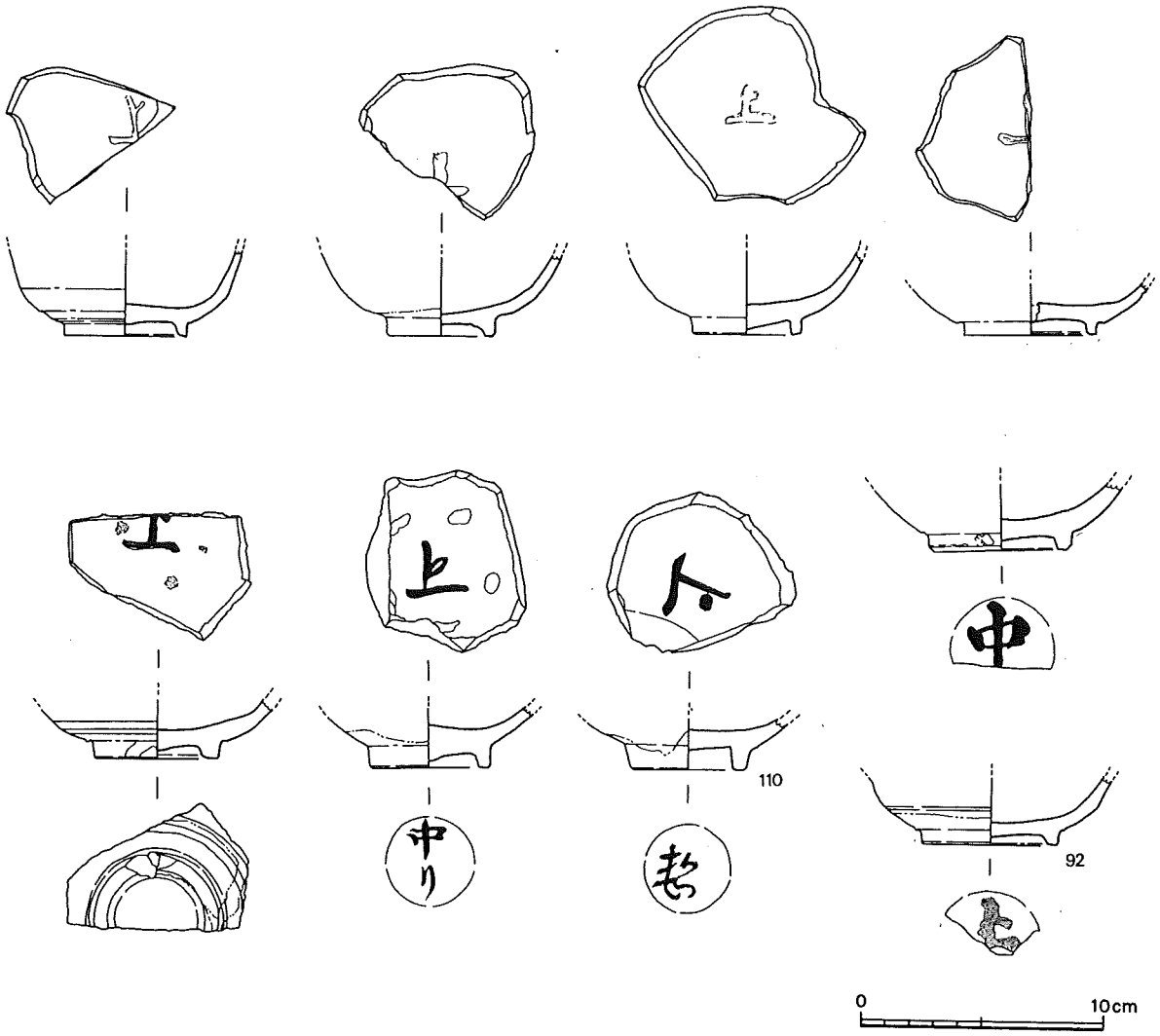
ては１４世紀～１６世紀のものが出土しており、なかでも１６世紀のものを主体としているようで、白磁碗・雑釉陶器が量的に多い。一般的に中世の遺跡での朝鮮王朝陶磁の出土割合は、１％前後でしかない。このことから考えると、桟原城跡ではそのほとんどが朝鮮王朝陶磁で占められており、対馬の地理的な位置が陶磁器にも反映されている。

参考文献

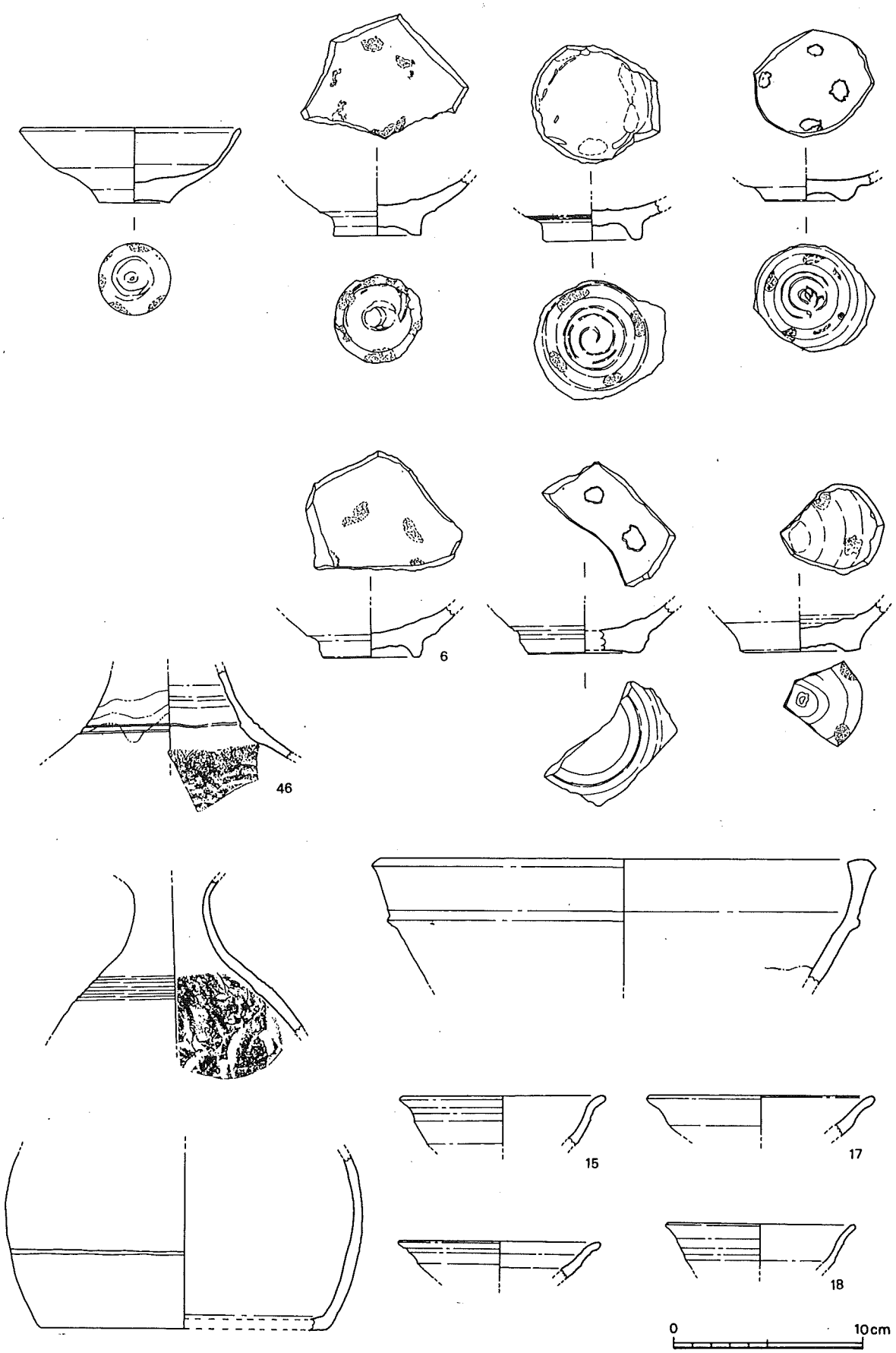
厳原町教育委員会　『桟原城跡調査報告書』厳原町文化財調査報告　第４集　1995

茶道資料館編　『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』　茶道資料館・関西近世考古学研究会　1992

泉　澄一　　『近世対馬陶窯史の研究』　関西大学東西学術研究所研究叢刊 八 1993



第４図　平成６年度調査区出土の近世陶器



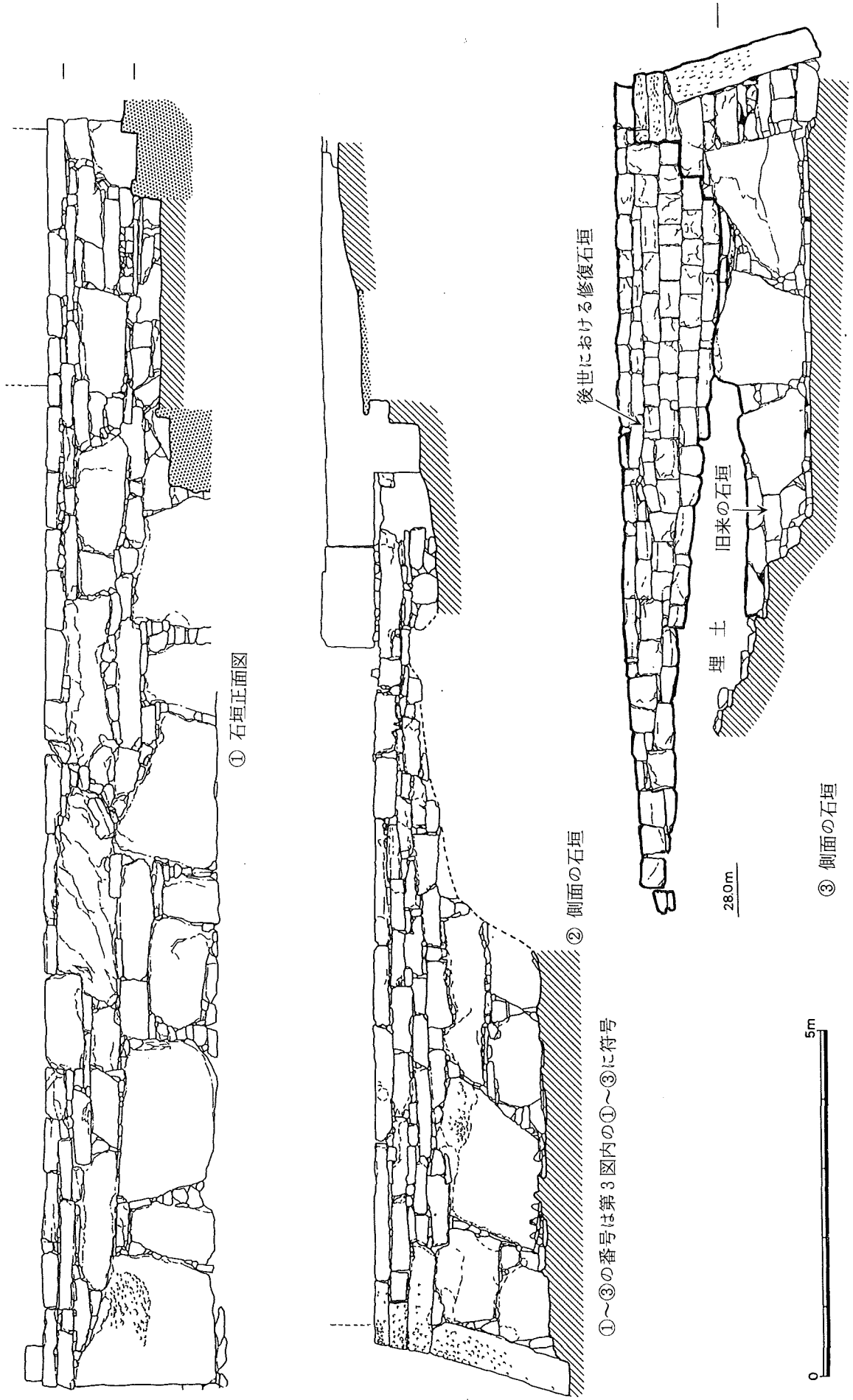
第５図　平成６年度調査区出土の朝鮮王朝陶磁器

石垣については、ＳＦ－１～５までが調査されている。石垣の基礎として２～３ｍの比較的大きな石を下側に置き、その間に細かな石を埋めて水平を保ってから、上方に長方形の石を積み上げていく方法をとっている。ほとんどの石垣がこの方法で構築されており、下段に粗割の大石をその上に長方形に加工した石を積み上げている。長方形の石が正方形になる部分があるが、正方形の石積みは新しい要素があると考えられる。

今回の調査は、桟原城の北西隅にあたり、道路部分との比高差が10m以上ある。石垣は、城の正面から西側を廻ったものであり、城の裏側にあたる。この部分の石垣が国道の拡幅により、埋められることとなり、記録調査が行われることとなった。実測については、株式会社パスコに依頼することとなり、７月15日～７月25日まで実測した。石垣は、西側列の遺存状態は良好であるが、北西隅のコーナー部分では膨らみを持ち、崩壊寸前であった。天端の部分についても同様であり、コーナー部分は概に崩落していた。実測した石垣は、長さ30m、高さは平均３ｍであった。

4、石垣遺構について　（第６図・７図）

平成６年度調査部分では、前述したように城の前面の石積みは、基底部分に巨石を据えて間積め石を入れ、巨石の頭で水平に揃えて、さらにやや大きめの石を載せていく工法をとって構築されている。これは前面の石垣についてであり、前面から隅角石をへて側面の石垣については、基底部分は巨石を据えるが、上位においては長方形に加工した石を上に載せていくことに相違がある。ただ、後に修復された石垣については、載せていく石材が、正方形に近くなっていく傾向があるようにおもえる。また、基底部分の巨石を載せる場合、巨石の下には薄い板状の根石を敷いて巨石を据えることも特徴として捉えられる。このような構築方法は、城の前面と側面の一部において看取され、城の北側（裏側）についてはやや煩雑になる傾向にある。また一の門とされる石垣については、一番丁寧な作りになっており石と石の間に間積め石を使用することなく、切石の段階で計算されて積み上げていることがわかる。このようなことから、城を取り巻く石垣については、城の前面が丁寧な作りになり、特に最初の一の門については特に秀麗な作りを意図していることから、石垣の積み方についても場所によって変化していることが伺える。桟原城以前に築城された金石城については、昭和56・57年の調査に詳しいが、石垣の時代における変化を摑むまでには至っていない。金石城は16世紀に築城され、江戸時代を通じて存続していた。とくに石垣にについては1665年に大手門を構築したことが文献によりわかっている。この大手門の石垣は、桟原城の前面の石垣と共通するもので、17世紀の石垣の構築方法が、前述した特徴をもつことが理解される。また現在、金石川周辺に構築された石垣は、何回かの修復がなされたことが石垣の積み方から解り、桟原城同様、門の部分に対しそれを巡る石垣は乱雑な積み方となっていることで共通する。金石城の中でも、16世紀の石垣と17世紀、それ以降の石垣が存在することは間違いないが、現在のところそのことについての言及はできない。



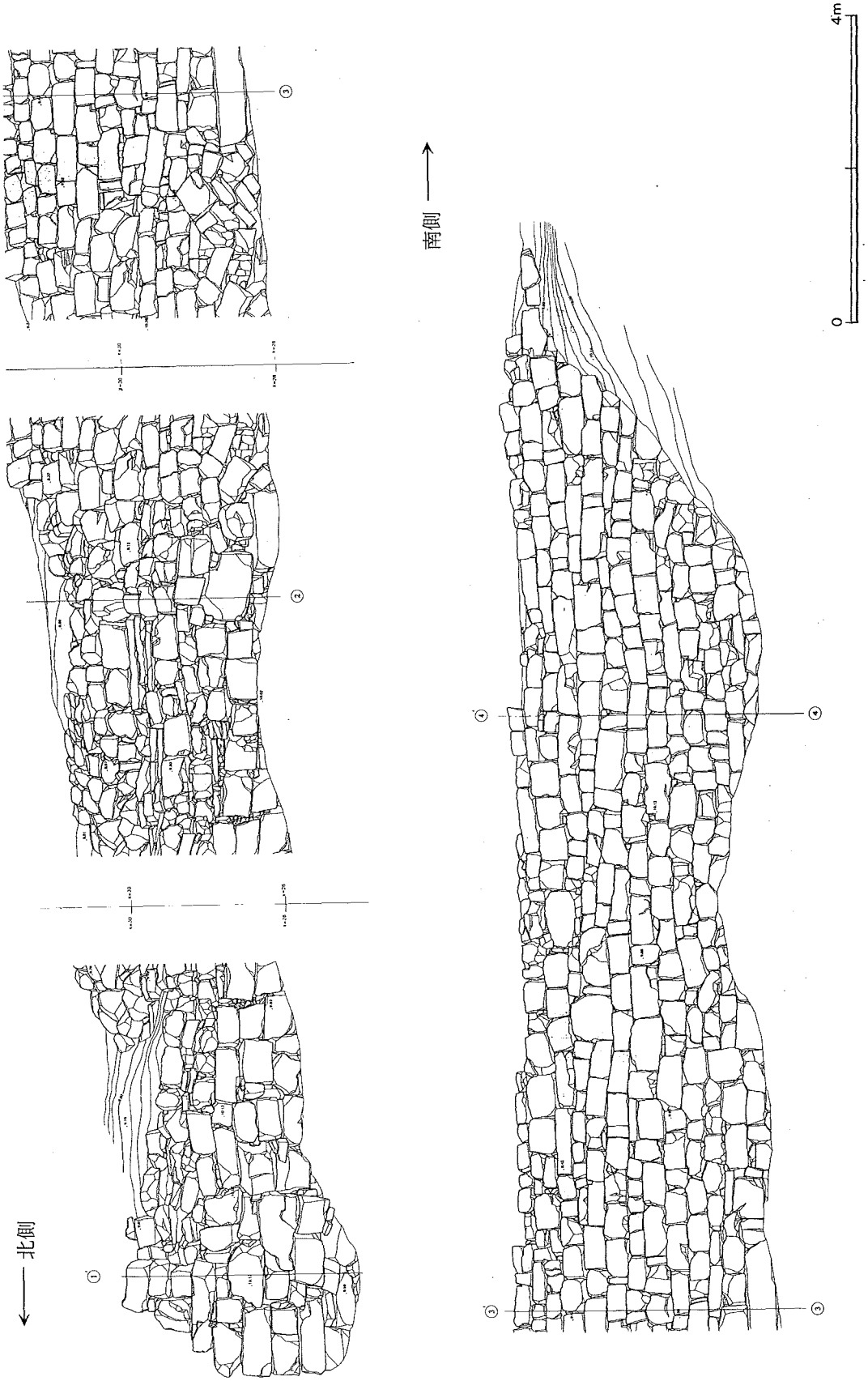
第6図　平成6年度調査区石垣実測図

このほかに金石城の背後に位置する清水山城の石垣などは、前述した二つの城とは石垣の積み方が相違するなど、今後石垣の構築方法の編年が期待される要素がこの厳原町の城郭から判明するものと思われる。すなわち、金石城初期の石垣（16世紀前半）、清水山城（16世紀後半）、金石城大手門・桟原城（17世紀後半）である。

今回の調査では30mの石垣を実測した。（第７図の実測図は、膨らみをもったところで図面上で二カ所切っている。また①ー①｀～④ー④｀は断面図の位置を示す）高さは最高値で３m50ｃmを測る。石垣の南側は、遺存状況は良く整然とならんでいるが、北側にいくにつれ上半部が乱れ、後に修復した可能性が高い。南側は、途中で構築が終わっており土が露出しているため、この石垣が城の北西隅の補強のために構築したものであることがわかる。②ー②｀ラインから南側では、長さ60～70ｃm、厚さ40～50ｃm大の石材と、長さ50ｃm未満、厚さ30ｃm未満の石材が交互に積み上げられている。水平を取りながら、下から一段ごとに構築したのであろう。その段数としては、12段前後とみられる。②ー②｀ラインより北側は、基低に長さ70ｃm大の大きな石を３～４段構築した後にやや小さめの石をつみあげているがこの部分が崩落している。特に②ー②｀ラインの北では、薄い板石を間に入れるなど、のちの補修と考えられる。断面は①ー①｀で根石より天端の傾斜角は約80度、③ー③｀で約60度を測る。北側の隅角部では垂直に近く、南側ではやや傾斜していることから、この歪みが②ー②｀ラインあたりで崩壊する原因となっているのであろう。ちなみに主郭前面の石垣は、傾斜角約75度を測る。石垣の石材の形状や傾斜角などからも両者の間に違いが認められるが、この違いが時期の相違を示すのか、単に城郭の位置における積み方の相違なのかは今後の課題であろう。

参考文献

長崎県教育委員会「金石城跡発掘調査報告書」長崎県文化財調査報告書　第３３集　1977
厳原町教育委員会「金石城跡」厳原町文化財調査報告書　第１集　1985
厳原町教育委員会「桟原城跡調査報告書」厳原町文化財調査報告　第４集　1995



第７図　今年度調査分石垣実測図（1／40）

5、まとめ

４の石垣遺構についての項で述べたごとく、厳原町内には三つの城跡があり石垣においても、それぞれに特徴が看取される。それぞれの特徴を第８図厳原町における近世石垣変遷仮定図に示してみた。①、②は平成５年度調査の金石城の西北隅にある櫓門の石垣である。①については、いわゆる野面積の石垣であるが、隅角石については、②やその発展した③の基底部の隅角石の初源的な様相をしめしている。②については同じ櫓門のもう一方の側面であるが、やや大振りの石を腰石として等間隔に据え、間に間詰め石を入れていく方法をとっている。この石垣の構築方法は、昭和５７年調査の石垣の一群と告示するもので、③の桟原城の石垣のように大きな切石を使用するまでには至っていない。ただ③の石垣とは小振りではあるが、隅角石に共通した要素があるものと思われる。③の石垣は、平成６年調査部分、金石城入り口部分にあたる櫓門石垣に見られるもので、隅角石に扁平な巨石を立て掛け小口部分を側面に、正面は素材の大きな面を見せている。側面は②よりも大きめの石を腰石として配置し、その上に長方形の切石を載せて水平を保つようにしている。④については今回調査した桟原城西北隅の石垣、平成６年調査時の修復石垣がこれにあたる。桟原城の修復石垣については、その裏込めから、18世紀後半の陶磁器類が出土しているため、このころの修復と考えられる。築城時の石垣に比べ、やや正方形に近い素材を用い、ほぼ水平に石垣を構築している。石と石のつなぎ目を段ごとに交差させ、力を分散させている。

石垣の構築年代について

①②の石垣については、1995年の調査報告によれば、この門は前面に川があり機能するためには橋がなければならず、文化年間に描かれた絵地図、及び年代不詳の絵地図の二枚ともに橋がないことからそれ以前に構築された可能性を示唆しており、遺物からも17世紀初め頃考案されたとする桟瓦の出土から、この櫓門の築造時期を17世紀前半と見ている。

③の石垣については、金石屋形を寛文９年（1669）に城郭の拡張や、櫓門を作って金石城としており、その時の櫓門がこれにあたる。また桟原城の石垣についても完成が1678年となっており、17世紀後半の石垣の形態として捉えられる。

④の石垣については、桟原城築城時の1678年の石垣の上に、その後修復した石垣がこれに乗り、裏込めから18世紀後半の近世陶磁器が出土するなど後世の石垣であることが理解できる。これらのことから、厳原町内での石垣変遷仮定図を作製して見た。この石垣の他に、清水山城の石垣があるが、実測図等が入手出来ないためこの場で検討することを避けたいと思う。

最後に、金石城の石垣遺構については1985年報告の『金石城』に詳しく説明され、多くの遺構から第Ⅰ期からⅢ期に区別している。第Ⅰ期を享禄元年（1528）以前の遺構、Ⅱ期を金石城の遺構とし、1528年～1679年の桟原城への移館まで、Ⅲ期を大正11年の産業講習所の遺構としている。この時期区

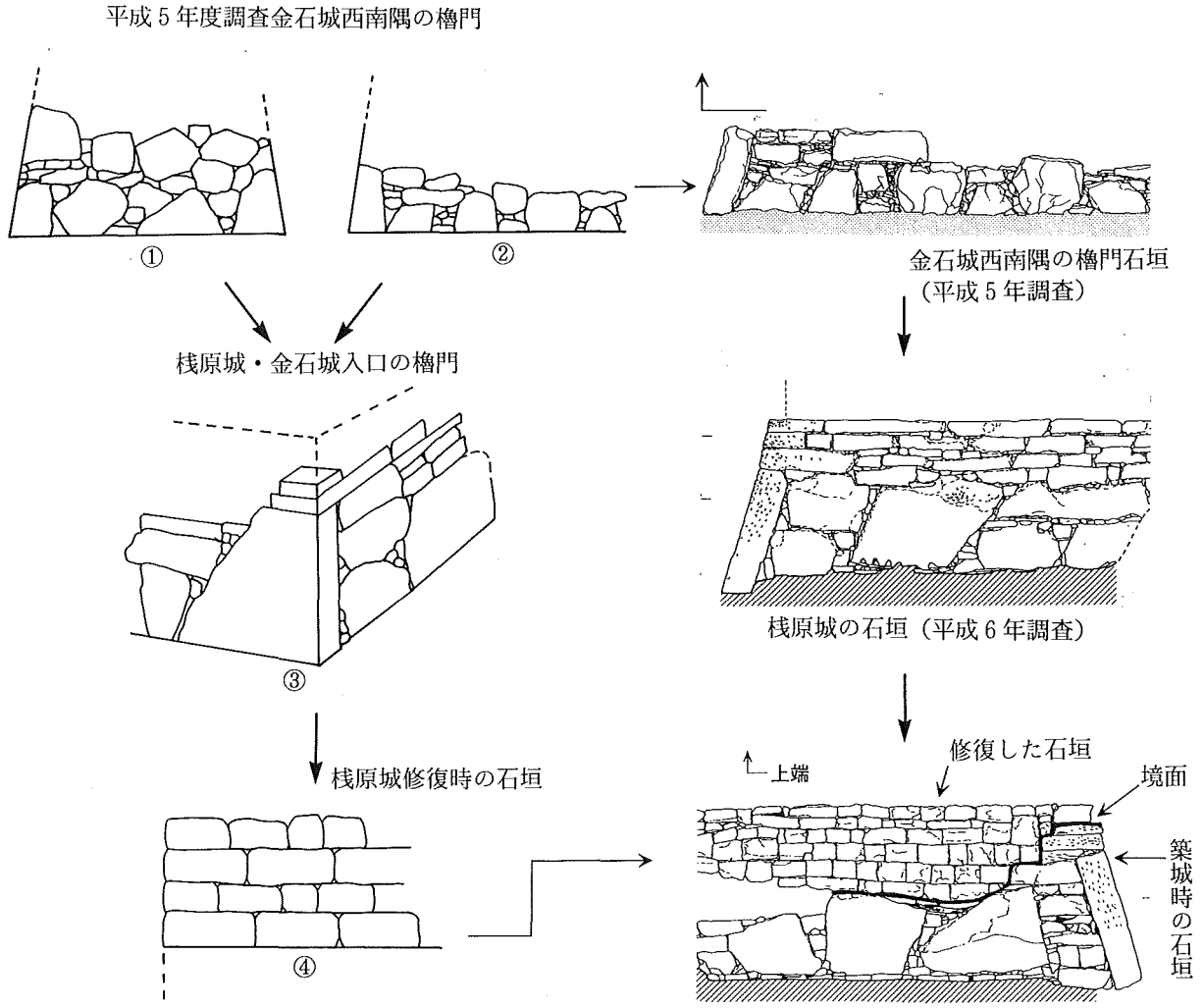
分の中でⅡ期とⅢ期に大きな開きがありすぎる。この時期区分では、Ⅱ期の1679年以降金石城はまったく機能しなくなったかのような誤解をうける。たしかに1679年に桟原城が政治の中枢となるが、それ以後も金石城はなんらかの形で機能していたことが考えられる。実際に22代宗義倫は金石城で政務をとっていることからも検証できる。このような事実からも金石城の石垣遺構はかなりの長い期間の変遷ができる可能性を秘めていることを記しておく。

参考文献

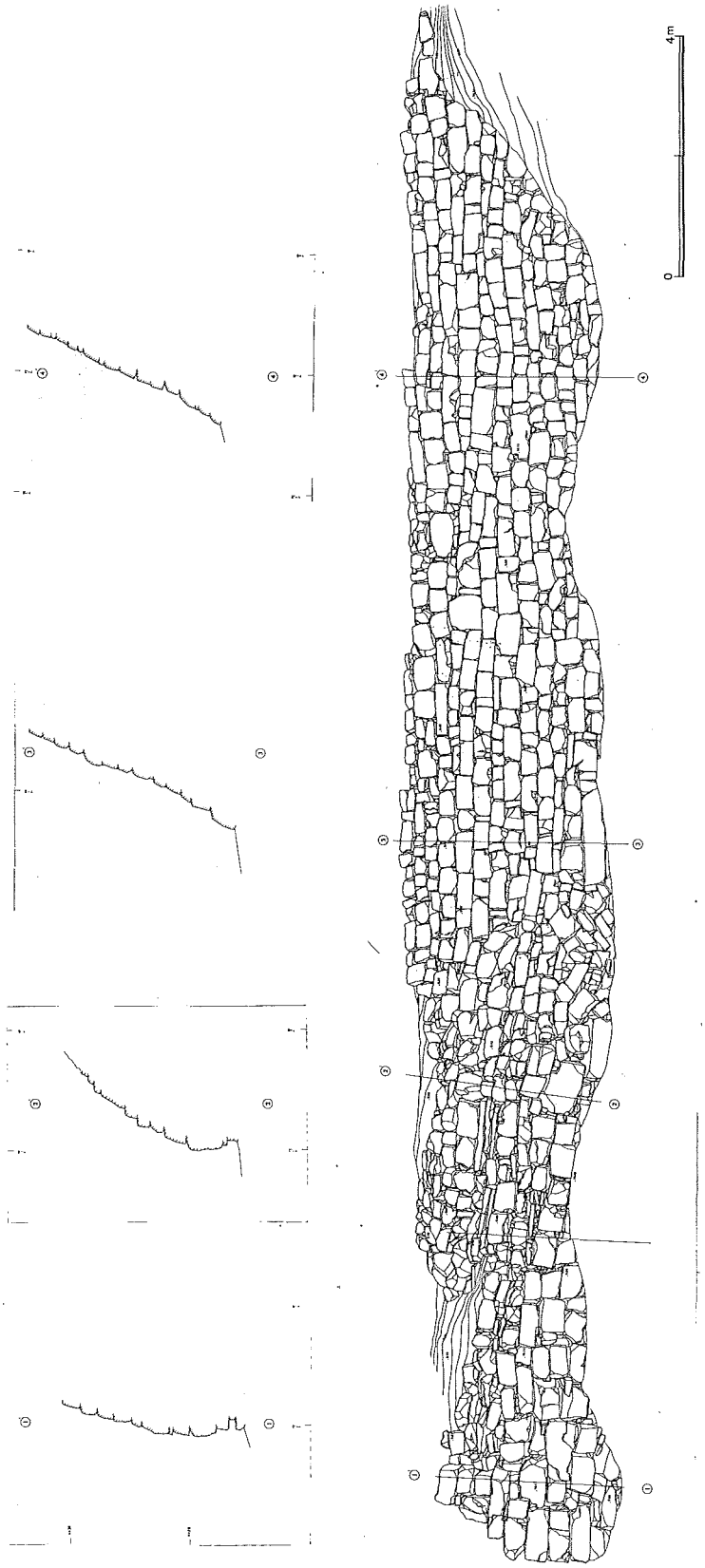
厳原町教育委員会　『金石城』厳原町文化財調査報告書第１集　1985

厳原町教育委員会　『金石城』厳原町文化財調査報告書第３集　1995

厳原町教育委員会　『桟原城跡調査報告書』厳原町文化財調査報告書第４集　1995



第８図　厳原町内における近世石垣変遷仮定図



第９図　今年度調査分石垣全体実測図、及び断面図

図　　版

①

②

③

④

⑤

⑥

図版 1　桟原城北西隅石垣（①～⑥北→南）

金石城西北隅櫓門跡石垣

金石城正門の櫓門石垣（1669年築）

桟原城の石垣（1678年築）、左側は修復された石垣

図版２　金石城、桟原城の石垣

長崎県文化財調査報告書第138集

桟原城跡調査報告書

1 9 9 7

発　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印　刷　川口印刷株式会社
長崎市田中町1020－7